

第二十二章 終戦直前の商況

一 出版物の規制

ところで書籍の輸入販売は、書籍部の事業であり、これと表裏一体をなして和書を刊行をしたのが出版部であった。已に第一編にも詳述されている通り、創業間もない頃の丸善出版物は、先ず医学書数点に始まり、次いで、啓蒙的出版物、百科全書、国文学書、理科教科書類、洋書翻刻、翻訳物、精神科学書、社会科学書などを手がけた。これが明治三十年代から、第一次世界大戦頃にかけて、情勢の推移に従い、極めて自然に理工学関係なものを出版するようになって来た。尤もそうした時代にあっても、商業、経済、政治、外交に関する専門書類が、比較的多く出版されていた。こうした傾向は、今なお継続されており、出版書目録を見ても、理・工・農・医にわたるものが多く、これにつづいて法・経等が刊行されている。しかし戦争中の問題は何をおいても印刷用紙の確保にあり、これまでに関係者の努力により、比較的円滑に入手していたが、用紙の原料であるパルプの資源が窮屈になった結果、昭和十五年十二月に日本出版文化協会が設立されて、用紙の割当制が実施され、その上更に十六年五月五日、日本出版配給株式会社が設立されるに及んで、書籍、雑誌その他出版物はすべてこの会社の手を経なければ販売出来ず、出版業界の事業もいよいよ困難な様相を示して来た。かような状態は当然丸善の出版部にも大きな影響を与えたが、

幸いにも申請用紙量の一〇〇％に上る配給をうけ、間接的には良心的出版会社であることが証明されたのであった。こうした傾向は同業者の不振にもかかわらず十八年までは計画通り進められて行ったが、十九年にいたり、徴用の強化と応召の頻発によって社員数が不足し、二十年には外的事情も手伝って新刊書の発行が殆んど出来なくなった。今、太平洋戦争中に刊行した我が国の主なる書籍・雑誌等の冊数を日本出版百年史年表所載の表を引用して列挙して見ると次の通りである。

年次	総数	普通出版物	官庁出版物	雑誌
昭和十六年	六六、五七四	二九、二〇四	五、五六三	三一、八〇七
昭和十七年	五七、八七六	二四、二二一	八、七九一	二四、八七四
昭和十八年	四二、二一一	一七、八一八	六、二一〇	一八、一八三
昭和十九年	一八、〇六〇	五、四三八	六、一〇五	六、五一七
十九年の十六年 に対する比率%	二七・一三	一八・六二	一〇九・七四	二〇・四九

この表によってもわかる通り、出版物総数が昭和十九年には昭和十六年の約三分の一に減少し、ただ官庁出版物だけが上回っているのは、広報宣伝活動のために利用されたものが多かったからであった。丸善では雑誌に類するものとして「学鑑」が発行されていたが、十八年にはこれまで行われて来た雑誌の統合廃止が強化された結果、ついに同年十二月五日第四十七巻をもって一時休刊の已むなきに至った。回顧すれば明治三十年創刊以来、本邦最古の宣伝冊子として、多くの知識人に愛読されて来た特色ある教養雑誌も、国策に協力しないわけにはゆかなかったのである。因にこれまで廃刊の憂き目を見た雑誌数は、八、四九八種類で、減頁を行いながらも、わずかに残され

たのは、全国を通じて三、〇八一に過ぎなかった。

このような不利な状況を克服しながら、丸善が刊行した書籍は、出版部所蔵の「戦時出版書リスト」によると、初版・重版を含めて次の点数である。

昭和十六年（九一冊） 昭和十七年（二一五冊） 昭和十八年（一六六冊） 昭和十九年（九三冊）
合計 五六五冊

この期の出版物のうちで至極遺憾なものがあったことを付記しておかなければならないだろう。それは「支那叢報」(Chinese Repository) 二十一冊復刻版の発行中止である。世界的に有名なこの叢報は、近世中国とその周辺地域に関する基本文献の一つで、已にして稀覯書の類に入っていたが、丸善では学界の要望に応える為、多大の犠牲を覚悟しながら、長い期間をかけて準備し、昭和十六年を期して発売に踏みきった。しかしながら日華事変の悪化（それなるが故にこの叢報が必要とされたのだが）や、出版統制が災いして、遂に中止するのやむなきにいたった。この書がいかに貴重なものであるかはこの広告に使われた左の内容紹介と、当時東洋文庫長の岩井大慧の解説によっても明らかである。

○中国事情研究の宝庫

一八三二年（天保三年）清朝宣宗道光十二年五月に当時、中国唯一の貿易港だった広東（現在の広州）で、

米人宣教師 Bridgman が創刊した英語の月刊雑誌である。Articles (記事) / Reviews (説林・論評) / Reports

(報告) 'Religious Intelligences (宗教雑信)' 'Journals of Occurrences (時事録)' 'Literary Notices (学芸録)' 'Miscellanea (雑録)' などから構成され、中国とそれに隣接する地域とに関する理解を深め正しい知識を得るための必読書とされている。

○アカデミックなルポルタージュ

特筆すべきは、アヘン戦争に関する記事で、現地における同時代の詳細な記録として、当時の国情をいかに伝える重要史料となっている。また、政治・制度・法律・商業・財政・軍隊・歴史・言語・文学・美術・哲学・宗教・風俗習慣・地理・自然など中国についてのあらゆる事象をとりあげ、そのアカデミックな性格と共に中国研究の宝庫として高く評価されている。

南京条約(一八四二年)締結後、香港の割譲、上海、廈門など五港の開港、貿易取引の自由、基督教布教の自由などにより欧州文化が各地に輸入され、旧体制から新体制へ目まぐるしく移り変ってゆく近代中国のようすが詳細に報じられている。

前東洋文庫長 岩井大慧

丸善の機関誌として古くから今日までも続いている「学鑑」——いまの制限活字では一寸お目にかかれないむずかしい文字で標題しているが——その昭和十六年九月号に、自分が「チャイニーズレガティ支那叢報」の東洋学研究、殊に近代支那学研究上必読すべきものであること、これを複印して誰にでもたやすく入手閲読できるようにすべきで

あると提燈をもったことがある。それと同時に、その頃の東洋文庫の研究員数人に願って御助力を頂き、当時、東亜にきていたそして東洋の歴史や人情・風俗・学問等々について研究していた西欧人の略伝なども紹介して読者になって頂くやうに喧伝した覚えがある。また支那叢報の総序にブリッヂマンが執筆しているが、これも当時、研究員だった沼田鞆雄等に抄訳を願って載せた記憶がある。この雑誌が出版された当時は、キリスト教を奉じている西欧諸国と東亜諸国との間には、知的乃至精神的な交渉などは全くなく、お互に思想とか宗教とかといふものを導入することは禁止さへされていた。それどころではない、この禁を犯せば死を以って罰せられるというきびしい状態でさへあったのである。

英語を支那語に、また逆に支那語を英語に訳して話すなり、理解することなどは先づ以って皆無と言ってもよい位の頃である。

編集は、東洋近代史上どうしても知って頂かなければならぬその頃の支那で活躍していたブリッヂマン、ウイリアムス、ジョン・モリソン、ロバート・モリソンやギュッツラフ等で、この叢書の総序を書いたブリッヂマンが主筆のやうな形である。

なお、これが出版事情を明確にするため、関係書類を調査すると共に当時専らその衝に当り、嘗々辛苦を嘗めた八木吉本の図書館長に詳細に質して見た。それによると、

最初は五〇〇部の限定版として予約募集をしたが、当時は世間一般の中国に対する関心が高く、又洋書輸入の困

難な時でもあったので、予想を超えて注文が殺到し、たちまち定数を突破した。そこで苦肉の策として、満州・朝鮮・台湾等の読者の期待に添うため海外版一五〇部を増刷することにした。紙材は凡て統制品外の上質和紙を用い、装幀用の資材も已に若干余分に確保していたから、印刷出版にはいささかの痛痒も感じなかった。従って最初の計画通り、第一回 本文五冊 解説五冊 計十冊の配本を行うことにし、

第一回配本 自一卷至五卷 十六年十二月三十日

第二回配本 自六卷至一〇卷 十七年八月五日

第三回配本 自一一卷至一五卷 十八年七月三十日

を刊行した。つまり毎年五巻ずつ配本したわけであるが、期待通りの好評を博したので更に以下続刊刊行の手順を整え、ジンク版まで出来ていた。ところがそれにも拘わらず、出版許可は遂に下りず、中絶のまま終戦の日を迎えた。なお、世情がようやく安定した昭和四十年四月、新たに全巻の複製を企画し、新規読者を募集すると共に、前回予約者にも呼びかけて第十六巻以後を分売することにした。但し今回は一括発売という建前をとり、同年十一月ようやく完成するに至った。

二 洋物等の生産低下

太平洋戦争前の丸善は、さながら一流百貨店の特選会場のようで、国産の一流品や舶来品が陳列されていた。すなわち、スコット、クリステイ、ステットソン、モザン社などの帽子があり、エガー、モーレーの毛織物あり、ア

トキンソン、格蘭、コテイ等の化粧品あり、その他ネクタイ、ワイシャツ、手袋、ハンカチーフにいたるまで、世界的な有名品が陳列場に並べられ、顧客の目を楽しめたものである。

しかし戦争勃発後外国化粧品の輸入は殆んど出来なくなり、在庫品よりはかなくなった。この頃は化粧品の大部分は国産品が占めていたが、化粧品は贅沢品と看做され、原料の輸入はますます難かしくなってきた。そこで特に実用的な製品の生産に力を入れ、好評の丸善アテナ石鹼、丸善ペーラムなど代表的なものの生産には、あらゆる工夫をこらし、顧客の要望に應えるよう努力した。参考のためこの頃製造中止または生産不能となった化粧品名を挙げて見ると――

年次	商	品	名	理	由
十六	丸善オールドコロン	丸善ヘアトニック	丸善ラベンダーウォーター	丸善オールドキ	原料入手難
	ニーン	ミルク・オブ・キューカンバー	アテナボマード	丸善歯香水	丸善水歯
	磨	サンダル石鹼	フルール石鹼	丸善浴用石鹼	丸善ローズ石鹼
	香水エロイカ	香水ボロネーズ	香水ソワレ		
十八	メロール・ローション	メロール・ギフトボックス			原料入手難・従業員減少
十九	香水ゴヤ	香水プチゴヤ	ゴヤ・ローション	ゴヤ・クリーム	ゴヤ・スキントニック
	香水オットー				津市の化粧品製造工場戦災焼失の為

等であつたが、あらゆる工夫によって開発した左の製品だけは、戦時中でも製造販売を継続することが出来た。

ペーラム・コスメチック ペーラム・ボマード ペーラム・ギフトボックス 丸善歯歯磨 タイス・オールドコ

ロン 香水バルカン リャン香水 リャン・アフターシエブ 丸善モルサップ タイイス・クリーム

次に洋品雑貨類では、特価毛布、特価メリヤス、丸善中折帽、丸善ワイシャツ、ウエザーオールコートなどがあ
るが、その中でウエザーオールコートは、英・米両国の長所をとり、これに独特の考案を加えた丸善特製品の一つ
で、従来は綿ポプリン地を用いたが、昭和十三年六月綿製品の製造禁止と共に製造は不可能となった。そこで絹紡
糸をポプリン風に織上げる研究に成功したので十四年七月から新製ウエザーオールコートとして売り出した。これ
は大変好評でこの当時洋品販売品中最高の売り上げとなった。

こうして好評を得たウエザーオールコートは、十五年一月二十日の絹配給統制令によって原料の入手が困難と
なったが、事前に手配していたため、十七年二月一日の衣料切符制が実施されるまでの二年間は、どうにか一般の
需要に応ずる事が出来た。十七年八月には一般に防空資材の整備が強調され、防空壕や貯水槽の築造が急速に行わ

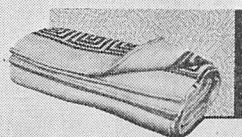
—特 價—

優良毛布

毛質が選んで毛足も長く、織りの
よいこと無類を越え、片側製品に十
二分代用が出来る、すなわち、毎年
比べて極めて格段な質の向上、特
價たる其味を發揮してあります

一枚掛 價士 圓五十錢

(内 送料 五錢)



特価毛布の広告

れ出し、これと共に日常の服装にも防護を重点的に取り上げ、
鉄兜の需要が急激に増大した。そこで丸善も鉄兜の販売をは
じめたが、一時は一か月間に二、五〇〇個の注文があつて、
これに応じられない位であった。十八年以降になると生活必
需物資に対する統制がいよいよきびしくなり、丸善が取扱っ
ている品は大抵が不用不急品扱いとなり、材料の入手は殆ん
ど不可能となったため、手持ちのワイシャツ、肌着類を販売

しながら營業をつづけたが、此の不況をわずかに救ってくれたのが、戦闘帽、国民帽などであった。しかしバナマ帽、麦稈帽、中折帽は殆んど売れず、二十年三月の空襲の時には、辛うじて直接の被害を受けなかった本店内に洋品倉庫があったため危うく戦禍を免れ、戦後の商品不足の折からたちまち売尽くされた。

次に事務用品の販売についてみると、丸善の營業品目中でも重要な位置を占め、その歴史もまた古く、優秀な輸入品を各界に提供して、永く同業界に確固たる信望を得て来たが、日華事変勃発頃から輸入が杜絶え勝ちになったため、漸次国産品の製造販売に切り替え、関係工場を督励して研究製作を推進して来たことは既に述べた通りである。従って大平洋戦争勃発後の輸入途絶に遭っても、いささかも動ずることなく国産品を以って需要に応えることが出来た。わけて軍部や軍需工場に対する納入が激増し、一般の要望に応えることが出来なくなった程であったから、文具部の機構を改め、従来の文具課・仕入課・器械課の他に軍需課・支店課を新たに設けて五課制をとり、軍関係への販売を強化した。しかし、十七年五月に始まった金属回收令の発令から、事務用器械の製造資材関係の統制が極度に強化された上に、関係工場の一部が軍需工場へ転換したため、タイムレコーダー、計算機、輪転謄写機などの生産は微々たるものとなってしまった。二十年三月の被爆によって文具倉庫は焼失し、保管中の諸品が凡て烏有に帰し、その上本店が強制疎開したため事務所を神田区淡路町に移転せざるをえなくなり、辛うじて神保町の神田支店や丸ビル売店などで残品の販売を継続した。

丸善と言えば、直ぐに「洋書の丸善」を連想し、そして「洋品の丸善」、「文具の丸善」、そしてまた「インキの

丸善」を思い起す。そのインキの種類は万年筆用、筆記用、製図用、印刷用、スタンブ用と用途が多方面にわたり、色彩の点でも原色あり、中間色があって、頗る豊富であるが、その中でも「丸善アテナインキ」は代表的で、われわれに一番なじみ深い名称である。日暮里工場は、常に質の改良、量の増加を計って逐年好成績を挙げ、昭和十六年度には三、一七五万オンスの量産に成功した。

このころ「学鑑」や、商品目録に現われた丸善アテナインキのキャッチフレーズは、

銃後の便りを戦場へ 丸善アテナインキ

で、他の商品の戦時色濃厚な広告文に比べると、極めて優雅であり、気品を具え、丸善の風格を如実に現わした名文句であった。

ところでインキの主な原料である染料、五倍子、没食子等は凡て輸入品で、それもドイツ、シリア、アフリカ及中国から輸入されていた。従って太平洋戦争開始後、輸入路が閉塞されると、忽ち強い影響をうけ、従業員の減少と相俟って生産量は、十六年をピークとして低下するばかりであった。そこで、製造過程を出来るだけ機械化し、人手の不足を補いながら生産を高めるために、自動充填包装仕上機（二オンス入インキ瓶包装機）の利用を思い立ち、十六年三月と同年十二月の二回にわたって、大阪西淀川区の大阪造機会社より購入し、第一回の機械は十八年十月に日暮里工場内に設置した。一方この二年間に、労務調整令・企業整備令が発令され、応召や徴用によって失なった従業員の補充に制限をうけたばかりか、容器の仕入れにも支障を来たし、一升瓶、ビール瓶、サイダー瓶等

を利用、終戦直前には計り売りまで余儀なくさせられた。しかも二十年四月の空襲によって日暮里工場は原料倉庫を残して焼失し、わずかに戦禍を免れた駒込工場でアテナインキのみを製造したが、その他のインキ製造は止むなく休止せざるを得なくなった。

ところで満蒙方面では、占領後急速に丸善の各種インキの需要が増し、製品の輸送に支障を来していたので現地の需要に応えるため、昭和十七年の春に満州国奉天市にインキ工場を新設した。

丸善の業態は所謂平和産業であったから、戦争開始当時では、まだまだ活躍する余地があったが、戦争が益々苛烈になって、本土決戦の聲が聞かれるようになっては、会社の存続を維持するだけがやっとであった。それでも一般庶民は、敗戦などという屈辱的な終末は信じていなかったが、貴重な物資が空襲によって焼失する心配があったので、努めて地方に分散疎開する手段をとった。当社でも内々その対策を検討中であったが、たまたま古書課長の柘植福太郎が適切な進言をし、その斡旋によって、次の如く疎開先を決定し、賃貸契約を結んで重要物資を現地に輸送した。

- 一、山梨県東山梨郡塩山町上於會一一二五所在、中村有国所有土蔵造倉庫一階二四坪
- 一、山梨県東山梨郡塩山町上於會一二四七所在、日向善三所有木造二階建洋風店舗五五坪

以上二者共十九年九月八日より向う満二カ年間の賃借としたが、何しろその頃の輸送機関は厳しく統制をうけていたから、疎開実現が思いの外手間取り、ようやく十月十五日と十一月七日の二回にわたり取りあえず一部の発送

を終えた。その内容は、

第一回 古書類 六三梱

第二回 古書（歐文稀覯書・重要科学関係雑誌・バックナンバー等）海外課の洋書目録、和書辞典類及び広告参考資料 五六梱

で、これらの凡ては梱包のままそれぞれの場所に格納した。

しかしこのような不況に直面しながらも、この年度（昭和二十年）上期に於ける売上益金は取締役会議の議事録によると

本店 古書 一四七、七二三円八〇

書籍 一四四、一六一・六七

文具 二八、一〇八・九四

洋品 一八、五一六・八七

駒込工場 一九、六五一・五五

本店合計 三五八、一六二・八三

を計上しており、相当の成績を収めたものようである。